

週日の説教

金 大烈 神父 2011年2月18日(金)

《神の国に近づくために -自分の十字架をとおして、イエス様に会いましょう-》

今日の福音(マルコ8:34-9:1)も昨日の福音と同じ意味で理解すればよいと思います。今日もいろいろ黙想は出来たのですが、ミサの前に読んだ本があまりにも感動的でしたので、それを急いで訳してみました。今日は、それを皆様に読ませていただきます。今日の福音について、司祭が黙想した内容です。

バルナバという青年がいました。三十代の半ばを過ぎた年齢ですが、まだ赤ん坊のようで、お母さんがご飯を口に入れてくれなければ食べられないし、大小便もお母さんが手伝ってくれなければできません。一人では何もできない重症障害者です。だから、彼のお母さんは片時も彼と離れずに世話をしていました。

周囲の人々は、そのお母さんを気の毒に思いました。しかし、バルナバのお母さんには、そのような人々の気持ちが理解出来ませんでした。お母さんは、「障害を持っているこの息子を通して私が頂いた恵みがどの位大きいのか、人々には分からないのです。」と語っています。彼女はいつの間にか、信仰の中で、自分が抱き締めている十字架と一つになっているのです。もっと正確に言えば、自分の背負っている十字架がもう苦痛の十字架ではなくて恵みになったのです。

ある日、バルナバのお母さんが、福音の分かち合いの時間にこのような話をしました。「先週は、バルナバの身体の調子が良くなって、彼を教会に連れて来られませんでした。息子のいない、一人で与るごミサは、本当に辛いものでした。まるで、イエス様がいらっしやらないように感じました。どんな時でも、バルナバと共に居られれば、欲しいものは何もありません。」

彼のお母さんは、自分の十字架を通して既にイエス様に会ったのです。地上で既に神様の国に生きているのです。

十字架のないことが神様の国を意味するわけではありません。むしろ、運命として背負って生きなくてはならない自分の十字架と一つになり、その中で主に深く出会って生きるのが、神の国なのです。神様の真の喜びと幸福は、このように生きる人々が受け取るものだと思います。

美しい話でしょう。私たちは、いろいろな痛みを感じながらこの世を生きています。そして、不幸なことは出来るだけ避けようとし、自分のところにはやって来ないように願いながら生きています。しかし、私たちの人生はそんなに易しいものではありません。条件的、環境的に優れた人々は、幸せに見えるかもしれませんが、しかし、すぐに過ぎてしまうこの短い人生で、真の幸せを感じられるのは、ある意味で十字架がきちんとできている人ではないかと私は思います。

皆様、十字架は重荷ではありません。今日の福音にも、「全世界を手に入れても、自分の命を失った

ら、何の意味があるのか」という言葉があります。この言葉をいつも心に刻みましょう。そして、自分ならどのような気持ちで、どのような態度でこの人生を生きるのか考えれば、すぐに答えが出ると思います。

バルナバのお母さんが見せた真実の生き方、それが今日の福音で話された神の国に一番近づける方法ではないかと思います。

ありがとうございました。